



中部大学春日丘高校 SGH課題研究

グローバル課題4領域について知り・気づき・探る学習

～ 医療・福祉 ～

I 取り組みの概要(3時間完了)

- 講演とグループ討論：7月2日(土) 3. 4時間目 中部大学51号館
 外部講師：林かぐみさん(AHI アジア保健研修所 事務局長)
 本瀬めぐみさん(AHI アジア保健研修所)
- 事後学習：7月5日(火)7限目

AHI アジア保健研修所とは

- ・アジア各地で人々の健康を守るために活動する現地の保健ワーカーを育成しているNGO団体。
- ・アジア各国のNGO職員、保健ワーカーを「研修生」として日本に招き、それぞれの活動を報告したり、自分たちで考え話し合い、問題を解決していこうという、参加型国際研修を行っています。
- ・研修生が自国の地域に帰った時、そこに住む人が主体となって活動を進めてほしいと願っていることから、参加型の研修を大切にしています。最終的には、外部からの支援がない中で、村の人々が助け合いながら自分達で健康な社会を作っていくことを目指しています。

II 外部講師による講演

●講演(導入)

講演者は、AHI(アジア保健研修所)の事務局長である、林かぐみさんです。

まず最初に生徒達に「自分の健康にとって大切だと思うことを3つ挙げてください」と質問されました。生徒達の解答は「食事・睡眠・運動・栄養・人・環境・気持ち・休養・息抜き・医者・音楽・家・予防注射・薬・笑顔・水」といったものでした。

そして、それらを手に入れるためにはどうすればいいのか、「保健を考える—People's Health in People's Hands をめざして」の文字がスライドに映し出され、私たちの手の中に私たちの健康があるとはどういうことか、そして、健康が手に入りにくい人の健康について考えてみましょう、と本日の講演のテーマが発表されました。

●講演(ネパールの話)

次に、配付された英文を読みました。1976年、ネパールの僻地の病院に3カ月間派遣された、ある日本人医師の話です。指名された生徒はパラグラフごとに音読し、要約しながら読み進めました。指名された生徒は緊張しながらも流暢に音読し、内容把握も的確でした。(英文は中学校3年生の教科書に掲載されているものだそうです。)

48歳の川原医師は、海外医療協力会からネパールの病院に派遣され、ただ一人の外科医として働くことになり、早朝から深夜まで休みなく働きました。ある時患者を診察した川原医師は、2週間後に再び診察に来るように言いました。その患者は「無理ですよ、先生」と言います。なぜなら、彼は川原医師の診察を受けるために、1週間歩き続けて、ようやく病院にたどり着いたのだから…。それを聞いた川原医師は、この地域の抱える問題に初めて気づきました。

日本に帰った川原医師は、ネパールの人のために自分に何ができるか、自問自答します。再び自分がネパールに行って医療行為を行うことはもちろんできるが、果たしてそれが最善のことなのだろうか…。悩んだ末に川原医師は、自分がネパールに行くのではなく、ネパールの医療ワーカーを日本に招き、治療法や予防法をトレーニングするための研究所を作ろうと思い立ちます。自分一人が医療行為を行うより、多くの医療ワーカーを育てる方が、予防法を広める方が、はるかに多くの健康を生み出すことができると考えたのです。

研究所を作るには莫大なお金がかかり、何から手をつけていいかわかりませんでした。川原医師は夢の実現のために、志を同じくする友人と、計画について何度も何度も話し合いました。

「**Health is wealth. That is true. But for most people, wealth is health.**」健康は財産である。それは正しいのだけれど、現状では多くのお金と多くの時間がある人だけが健康を手に入れることができる。しかし健康は、すべての人の権利であるはずだ…

1980年、とうとう川原医師の夢が叶い、研修所の設立にこぎつけました。彼こそが、川原啓美氏、AHI アジア保健研修所の設立者です。



● 講演（研修所の役割）

アジアの貧しい地域の人々は、病院に行ったときには、もう手遅れになっていることが多かったそうです。貧困ゆえに幼い子供も家事労働をしなければならず、なかなか病院にも行くことができません。一体どうすれば健康を守れるのか。大切なのは「病院の外で健康を守る」こと。医師はもちろん大切です。しかし、医師にかからなくてもいいように、一人一人が自分の健康を守れるようにすることはもっと大切。

色々な国から保健ワーカーを招いて、自国での取り組みの発表や交流をし、保健ボランティアの育成をすることがアジア保健研究所の役割です。自国に帰った保健ボランティアが地域の人々に薬草の作り方を教えたり、病気の予防法を教えたり、一人一人ができることを増やすことを目的としています。

また、体と心、両方が伴っていなければ真の健康とは言えないとの考えから、差別を受けている少数民族の支援、災害後の健康作り活動、食生活指導など、様々な支援をアジア各国で行っています。

—「すべての人々の健康は、みずからの手の中にある」—



Ⅲ グループディスカッションと講演者への質問

この日のまとめは、生徒によるグループディスカッションです。講演を聴いて、個人で「発見したこと・もっと知りたくなったこと」をプリントに記入し、グループで発表して話し合い、知りたいことを班で1つ選んで講演者に質問をしました。以下に質疑の例を挙げます。

○（フィリピンの貧しい村では、男の子が学校に通い、女の子は学校には通わず、水くみなどの家事労働をすることが多かったという話を受けて）体力的にも男の子が働いた方がいいように思うが、なぜ女の子が働くのですか。

→今ほどジェンダーの問題が意識されていなかった昔には、多少女性蔑視の歴史があった地域もあります。

○アジア保健研修所の、具体的な仕事内容は何ですか。

→代表的な仕事は日本で行う国際研修で、アジア各国のヘルスワーカーを招待し（今年度はインド、インドネシア、タイ、パキスタン等を予定）、日本人も参加してそれぞれの実践報告や問題点を話し合っています。一人で考えるのではなく、みなでアイデアを出し合うことを大切にしています。

○人材育成は、どのくらいの実績がありますか。

→1980年に発足してから、およそ650人がアジア各国から国際研修に参加しています。そのあとは、それぞれの参加者が自分の場所で様々な活動をするにつながっています。

○貧しい地域で兄と妹がもしも同時に病気にかかったとしたら、やはり病院に行くのは兄が優先されるのですか。

→今は男女差別についてもだいぶ改善されてはいるけれど、昔は確かにそういう傾向もありました。ただ、今ではネパールもバングラデシュも、女の子の就学率はだいぶ上がっています。



Ⅳ 講演の最後に

もう一人の講師である本瀬めぐみさんからお話をいただきました。本瀬さんは保健師としてご活躍でいらっしゃいましたが、AHIの活動を知り、参加を希望されたそうです。

保健師としての立場から、病気を治すことより、病気にかからないようにすることが大切だとおっしゃいました。医者になることだけが健康を守るのではなく、よりよい暮らしが健康作りへつながってゆくのであり、健康になることは最終の目的ではありません。健康だからこそできることが、たくさんあるのです。

●講演を聞いて

今回は「医療・福祉」の領域ということで、生徒達にとって身近で分かりやすい題材であったと思います。AHIの設立者である川原先生の話は、日本語ではなく簡潔で分かりやすい英文で読むことで、かえって川原先生の志がストレートに伝わってきたように感じました。

AHIの活動内容、理念もよく分かりました。自分が直接にするのではなく、一人一人ができることを増やしてゆく方が未来につながるという考えは、私たち学校現場にも通じる考え方だと思います。教員が何でも世話を焼くのではなく、自立してできるように見守ること。それが、自ら課題を見つけて探求するSGHの活動の理念ではないかと感じました。

貴重なお話を、本当にありがとうございました。

V 事後学習

AHIの活動内容から、健康を守るためには何が大切なのかを学んだ上で、まとめの事後学習を行いました。

事後学習では、「エイズの現状と悪循環」をテーマに、資料を用いて世界、特に途上国における深刻なエイズの蔓延の現状を知りました。親がエイズに感染することによって、子供が親の看病をすることになる、一家の働き手を失うことで子供が経済的に困窮する、児童労働に従事しなければならない、子供もHIVに感染しやすい環境に置かれる、といった問題が生じることを理解しました。

その悪循環を断ち切るためにはどうすればいいのか、必要な支援は何か、自分が考えた手立てをグループで発表、共有し（1グループ4～5人）「エイズの悪循環を断つための最適な方法」をグループとして1つに絞り、クラスでプロジェクターを用いて発表しました。

最後に「JICAによる感染症対策事例」の資料を読み、正しい知識と予防法の大切さを確認しました。

